
王様狩りに行こうよっ！

閉まれドア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様狩りに行くこうよっ！

【Nコード】

N8220Y

【作者名】

閉まれドア

【あらすじ】

「人は戦わなくてはいけない。」
幻影のキングという人物の発した、あまりにも曖昧で抽象的な言葉が、ネットでは持て囃されていた。

どこにでもいるごく普通の平凡な中学生、富士見貴則は放浪の旅の末、5年前に生き別れた姉の富士見希乃と再会し、全力で殴り飛ばした。

学校で生徒から絶大な人気を得ている希乃は『幻影のキング』と呼ばれ、教室を不法に占拠したりとやりたい放題をしている問題児であつた。

二週間後、希乃の手回しにより強引に学校に住まされた貴則は仲間との山菜狩り（兼恋愛対策会議）の最中、自分の常識を超えたものと遭遇する。

これは、居場所を求め旅をしてきた少年と彼を受け入れた仲間達との友情と、勇気を奮い立て巨悪に立ち向かっていく姿を描いた王道青春巨大ロボットSF物語であるッ！（たぶん）

ブローグ

【人は戦わなくてはいけない。倒すべき相手は常に身近にいる。戦いを嫌うのは悪だ。自分の可能性を否定する事だ。今、君は戦っているか。戦いから目を背け、今ある世界に妥協してないか。もし少しでもそう感じているのなら、脱却しろ、その世界から。叩き潰せ、その世界を支配するものを。】

四日前の事だ、この言葉がネット上に放り込まれたのは。

そして瞬く間にこの言葉は拡散していった。

誰かがこの言葉に哲学的な深さを見出だしたのか、よくわからない何かと戦う決心をつけたのか、この言葉をネットに送り出した奴が凄いのか。

少なくとも俺はこの言葉に賛同しかねる。

倒すべき相手が何なのか、あまりにも抽象的すぎる。無責任だ。虫酸が走る。

理想的な単語を並べただけでは世界は変わらない。

この発言をした奴は幻影のキングと名乗っていた。

このハンドルネームも気に入らない。

いくら何でもネーミングセンスが酷すぎないかこれは。

こいつ、名前登録する時絶対ドヤ顔でエンターキー押しただろ。

じゃなかったら決定ボタンか、左クリックか、タッチパネルか。

いずれにせよドヤ顔だったという推測は間違いなく当たっているに決まっている。

俺はこのネーミングセンスに見覚えが、それと聞き覚えもある。

そいつがネットで幻影のキングとかいうハンドルネームを名乗り、格好つけて呟くだけで何万ものフォロワーから反応を受けている張本人だとしたら・・・とりあえず、とても痛くて世間に顔を出せないような気がする。

平日のせいか、アトウギ市の誇る駅前の市街一帯へと向かう車はとも少ないように見える。

俺が歩いてきた田園地帯にポツンと置かれた一本のごく普通の道路を道なりに、東へ進むと丘に突き当たる。

田園地帯が広がっているような所の目の前の丘と言っても、緑の丘みたいなものではない。

アトウギ市は神奈川県ほぼ中心部に位置しており、地図に載れば神奈川県の代表的な市として数えられるほどの規模を持つ市だ。

田園地帯はおろか山の中に温泉街まで持っているのだが、田舎臭さがこの市の魅力というわけではない。

俺が歩いてきた田園地帯を含む山間部、温泉街は市の北西に位置している。

北に町や県唯一の村、ダム、西には県屈指の山がある市があったりで、その影響を大きく受けている反面、市の東側には真アトウギ駅を中心にビルやデパート、商店街などありとあらゆる物件が立ち並んでいる。

この神奈川の県央地区の市の中でもアトウギ市の市街地はかなり栄えている方だ。

この坂を上り切ると下り坂を下った先はずっと平地となり、アトウギ市街を一望することができる。

そしてこの丘のてっぺんには、ある高校がある。

神奈川屈指の学力を誇る、アトウギ市を代表する公立校。永川高校。この学校には裏掲示板がある。

一時期は学校裏サイトと呼ばれて全国で問題になった代物の一つだが、数年経った今でもこの学校の生徒の間で頻繁に使用されているようだ。

だが覗いてみると、その使われ方はどうもよく一般に聞く裏サイトのものとは毛色が違う。

悪口とか陰口とか、そういう問題のある書き込みはあまり見当たらず

ない。

流石は県屈指の学力を誇る模範校だ！・・・なんて褒めるべきだろうか。

そもそも裏サイトが存在している事を咎めるべきか。

だがこの学校の生徒の大半が画面の向こう側に着目している。

ある人物が書き込むスレッドに異常な数の書き込みが押し寄せている。

一体何がこの学校の生徒の心を驚掴みにしているのか。

何度その人物の書き込みを見ても俺には何が魅力的に感じられるのか理解できない。

発言でインターネットを賑わす謎の人物、ハンドルネーム、幻影のキング。

彼は彼の言葉全てを、この裏サイトに一番最初に載せているのだ。

裏掲示板に書き込んで、その後には別のサイトで呟く。

どうしてこの高校の裏掲示板から書き込みを始めるのかは分からない。

その理由を誰もが推測しようとするが、書き込んだ張本人の口から真意は未だに語られていない。

幻影のキング。

日本中のネットサーファーが注目する謎の人物。

ある高校の裏掲示板に最初に書く理由を推理してみるとしたら、やはりどう考えてもその高校の生徒だから・・・という理由しかない。そして俺は、幻影のキングという言葉に聞き覚え、見覚えがある。

坂を上りきったところを左に曲がる。

すると、並木林に囲まれた緩やかな坂の先に校舎が見えてくる。

この先に、この先にその高校がある。幻影のキングがいると思われる高校が。

学力の高い学校だけあって、正門はとても立派な構えをしている。青く茂る並木林を抜け、校門の先に立つ学校を視界に捉える。

「ふっふっふ・・・。」

女性の笑い声が聞こえた。
校門に女子の姿があった。

バサツと広がった金髪、白と黒のセーラー服。

女子はまるで俺がここに来るのを分かっていたかのようなしたり顔で、俺の姿を目で舐め回す。

こちら辺の学校では見る事の無い、無駄に青い学ランを開いて着用した少年を珍しがっている・・・という風に見るにすれば、女子の俺を見る目は感情がある。

俺の事を知っていて、探していて、待ち望んでいたような目。
その目が一通り俺を見つくして、俺の顔へと視線が戻っていく。

「待っていたぞ、富士見貴則・・・。」

女子が俺の名前を言い当てる。

こいつは知っている、俺の事を。

「ようやく辿り着いたようだな、我らの手による樂園、安住の地へ・・・。」

女子が俺に手を差し伸べる。

その後ろでは次々と生徒が校舎の窓から顔を出して様子見をしていた。

物珍しさに惹かれたのであろう、いつの間にか窓という窓は全て人で埋まっている。

「人は前に進まなきゃいけない。じゃなきゃ生きていく事はできない。貴則は生きているか？ 毎日を、十代の生きるべき日々を。私

は生きる。毎日生き生きしようと頑張っている。毎日元気でいたい。
楽しく日々を過ごしたい。その為には・・・」

「うおおおおおおおおおおお!!!」

俺は大地を力一杯蹴り上げ、右手に握り拳を作って女子へと走り出した！

「ほう・・・我が胸に飛び込んでくるかッ！ 富士見貴則イ！」

「どおおおおおりあああああああ!!!」

女子の頬に、拳を一発。

「ひできッ!」

「「「き、キングううううううう!!!」」」

この日、生徒達の悲鳴が学校中に響き渡った。

1話1 山菜狩り兼恋愛対策作戦会議（前書き）

1話1 山菜狩り兼恋愛対策作戦会議

アトウギ市の北西部は山が連なる山岳地帯だ。

人の手が入る事はあまりなく、二週間前に歩いた市街地と田園地帯の境界よりも人通りが少ない。

むしろ山間部に入ってきてから車を一台も見えていない。

温泉街の入り口の紅い派手なアーチが寂しげに道路へかかっている。そもそも平日に出入りが頻繁に見られるような所ではないのだから当たり前と言ってしまうは当たり前前の光景かもしれない。

が、だとしても、今俺達が同道とど真ん中を歩いている道路は一応清川村というアトウギとは別の行政の所に続いているはずなのだが、
・車も人も全く通らない。

聞こえてくるのは道路のすぐ横に流れる川の音と、俺達の声と足音だけだ。

自転車を押している男子が二人と、徒歩が二人。女子が一人で、もう一人は俺。

計四人の学生パーティが山道を突き進む。

いくら放課後だからって、制服姿でこんな山の中を歩く部活はそうそう無いと思う。

俺達は今、既存の部活動をも超える、未知の険しい活動を行っているとと言える。

・・・言ってどうする。

「・・・さて、どこから登ろうか。」

自転車を押している長髪の男、日向岡成実が右方に広がる森林を見渡す。

森林へ入る隙間を探し、程よく登りやすそうな箇所を探す。

自転車を森林の前と言えど道路の脇に何台も止めておくのは抵抗があるが、俺がアトウギに来て早二週間、廃品業者や放置自転車の回収車の類を未だに見かけていない。

駅前の市街地でさえ見かける事は無かった。

こんな山の中に限って、ここぞとばかりに自転車が持つて行かれるとは思えない。

まあ、こんなメンバーの中でそんな心配をしているのは俺だけだろうけど。

興味のある対象が視界に入ると、周りが見えなくなる。

小学生くらいの頃ならよくある事だが、流石に高校生にもなってそうであるのは子供すぎるのではないのか。

そしてそれに気づいて恥じるような事はしないのだろうか、ゼイ、アーは。

年上と言うより体だけが大きくなった同年代みたいだ。

だが年齢を笠に着ず、ここに来て二週間の俺に対し友好的に接してくる。むしろ馴れ馴れしい。

彼らの頭は空っぽなのだろうか。

こんな辺鄙な所に自転車を置いておいたら誰かに盗られるかもしれない、なんて事も頭の中には無いのだろう。

「よし、作戦会議もいよいよ本番へと突入ですぜ！」

四人の中の紅一点、出縄晶が自転車を止める。

「え、こっから入るの・・・？」

「え、よくない？」

「無理じゃない・・・？」

目を覆い隠す長さの前髪を手で横に流し、視界を開いて日向岡は出縄に言った。

日向岡が戸惑うのも無理は無い、出縄が足を止めた所は特に急斜面であつた。

山ガールという単語ができたからと言って、間違いなく人の手が加わつていそうにないありのままの山を登るような女子は絶対にいない。

てか男でもやらない。こんな森林ウォールを登るってどんな趣味だ。「ひゅーちゃん。」

「は、はい、なんでしよう出縄さん。」

「男ならどんなに厳しい壁でも、乗り越えるべきじゃないかなつと。」

出縄が指差す方向は、やはりどう見ても急斜面。

本当にこれを登るんですか、出縄さん。

「確かに……。」

今回の山菜狩りの発案者である日向岡があっさりと許可してしまった！

おい男代表！ その判断はどうなんだ！？ てかお前戸惑ってただろ！

「では、今回の山菜狩り兼健全恋愛作戦会議の本会場は、こっからスタートという事に決まりましたー！ わーぱちぱち！」

出縄一人が勝手に盛り上がる。

こんな山、登れるはずないだろ……という空気が残りの男子三人に流れる。

そして俺には、どうして放課後に山菜狩りをするのか、山菜狩りと恋愛作戦会議とやらを同時に行おうとするのか、というかここはもう学校からかなり離れているんだけどか、こんな所で恋の話なんとする必要無いだとか、異論ばかりが浮かび上がる。

言葉にするのが面倒だ。こいつらは本当に高校生なのか。これは高校生の発想か。

そもそもこの恋愛会議、メンバー的に成立しないだろうと先ほどからずっと思っているのだが、主催者の日向岡は分かっているのだろうか。

肩まで伸びているほどの髪を持つ彼の頭は、恥ずかしがり屋の表情を守るには持ってこいの量だ。

中学の頃からずっとこの長さを維持しているらしい。

生意気にも＼シャツをズボンから出しているが、不真面目な生徒と言うよりマヌケそうな三枚目としか言い表せない違和感が彼から出ている。

しかも不良っぽさを演出しようとしている割には、趣味は山菜狩りときた。

特技は山の幸をふんだんに使った料理。家庭科の時間はいつも彼の独断場らしい。授業を一人で独占すんなよ。

そんな日向岡が健全恋愛作戦会議の発案者であり主役であるのだが、こいつが好きなのは出縄だ。

出縄の前だと日向岡は何気ない日常の会話でさえもテンパってしまい、気の利いた切り返しもできなくなる。

セミロングで前髪パツツンの髪型から繰り出される、毎日クラスを騒がす眩しい笑顔（本人談）の前では日向岡はイエスと言うだけの機械と化してしまうのだ。

なんで好きな相手を会議に入れているんだよ。それもう会議にならねーだろ。会議するなら告白しろよ。

で、もう出縄が勝手に石垣をよじ登って斜面を登ろうとしている・・
・誰か止めないと三歳がりの最中にパーティが全滅するぞ。

「待てよ出縄、自転車に鍵ぐらいかけとけよ。」

俺、日向岡に次ぐパーティ三人目の男子、万田耕太郎が一人暴走する出縄に待ったをかける。

おそらくこのメンバーの中では俺の次にマトモなんじゃないかと思っている。

背高のっぽで周りより物が見えるからか。だけど性格は中学生の頃のを引き摺っているような感じだ。

物事に対し斜に構えて批判的な評価を下す。

だから日向岡みたいに出縄の言う事にイエスと言わず、物事を割としっかりと判断できる。

日向岡のいいストッパー役だ。

ストッパー役の癖に山菜狩りを止めなかったけど。

「鍵い？」

出縄が振り返って聞き返す。

「大丈夫っしょ。私達の学校のシールが張ってあるチャリをパクる

勇気がある人なんて、この辺にいるはずが無いよー。」

「一理ある。」

「ねーだろ。」

日向岡のイエス癖がまたも起きている。なんだお前、高校を何だと思っているんだ。どこの勢力と戦っているんだ。

「森子様の威を借りるってか。」

万田は特に肯定も否定もしなかった。

出縄の言う事は高校生や中学生、年の近い相手なら実際には間違っていない。

俺達の学校には撫子原森子という女子がいるのだが、彼女が存在は隅々まで、アトウギ市の学生にその存在を知られている。

見た目はとても小柄で、子供っぽくて可愛いのだが、何故か常に長袖で、何故か常に背中に剣を背負っている。

授業中も食事中も常に背負っている。第一印象は子供のような可愛らしさよりも、肩からはみ出た剣の取っ手の部分に目が行った。

都会の女子高校生は怖いなと俺は思った。

いつも生徒会長のイケメンボーイな板坂間と行動していたり、学校で誰もが様付けで呼んでいたりと、学校で最も意味不明な人だ。

それで更に他校の高校生と何度かいざこざを起こした結果、彼女を現代に生きる侍と慕う舎弟が何人もできたという。

いや、侍なら腰に剣差せよ。いや、差すなよ。どうして剣を持っているんだよ。

「森子様は強いからなー。確かこの前は窃盗グループを一人で壊滅させたんだっけ。」

「現行犯の所を、スパツとな。」

「流石は現代に生きる侍だよな。」

男子勢の会話がおかしい。撫子原森子って一体何なんだよ。

まだ俺は森子様とやらの活躍を目にしていない。

いつか俺も彼女を現代に生きる侍と崇める事になるのだろうか。都会の学生は怖いなって俺は思った。

「てな訳で山登っちゃいましょー!」

出縄は再び石垣へ手を伸ばし登ろうとしていた。

「待てよ出縄。」

「おや、どうかしたかい？ 貴則君。」

仕方ないので俺が出縄の暴走を止める事にする。

「お前がどうかしてるわ。こんな場所マジで登る気かよ。」

「自転車なら大丈夫だよ。」

「そっちじゃねーよ。」

「森子様のご加護があるから!」

「森子様神様かよ。」

「ぶっちゃけ守り神みたいなものだしね。」

「ご加護の前に自衛を徹底しろよ。」

「全く、貴則君はお節介ですねえ。おつかあは、そんな風に育てた覚えはありませんよ。」

出縄が石垣から飛び降りる。制服を着ているなのにその動きは軽快だ。

俺は俺で学ランの内ポケットに物を入れすぎていて、この格好で走るのは避けたいなと思う。

日向岡達だつて着ているのはブレザーだけど内ポケットがあるのだから同じ思いを共有しているはずだが、なんで山の中で山菜狩りなんてやろうとしているのだろう。

「おつかあとかじゃなくて、お前とは故郷も学校も違うわ。」

「残念、騙されなかったか。」

騙されねーよ、じゃなくて何言ってるんだよ。

「そういえば貴則がここに来てから、もう二週間経つんだよな。」

「ああ、そうだな。」

ぽつと出てきた日向岡の言葉に適当に相槌を打つ。

こいつらの学校に殴り込みをかけて早二週間。

俺は幻影のキングこと富士見希乃を全校生徒の前で殴り飛ばした訳だが、どうした事か、俺はこの学校のクラスに入れられ、教室に住む事になってしまった。

何を言っているのか分からないだろうが俺もよく分かっていない。

残念ながら俺の姉である幻影のキング、富士見希乃は何故か学校の教室の一つにソファーやらテレビやら私物と言うには大きすぎる物を数多く持ち込んで占有している。

希乃と同じクラスである日向岡、万田、出縄達も放課後になるとその教室に入り浸り、時には寝泊りまでしてしまう。

現にこの二週間の内に何度かあった。学校に泊まるっておい……。

永川高校における富士見希乃の存在というのは異様なものだ。

幻影のキングと名乗ってネット上でよく分からないお言葉を発信したりしているが、その影響力はネットよりむしろ学校の方が大きいみたいだ。

永高において二年四組の富士見希乃は生徒からの注目がとても多くてイケメンボーイの生徒会長よりも人気があり、学校を代表するスターだと自分で言っていた。

あとから生徒会長本人に聞いてみたら彼も希乃の言う事をそうだねと肯定していた。

生徒会長は希乃達よりも学年が上のはずなのだが、生徒会のはずなのだが、何故か放課後になると希乃達が占有している教室に撫子原と一緒にいたりする。

それでいいのか生徒会長。

あの生徒会長にしてこいつらあり、とも言える。

「最初はキングルームにいるのも嫌だって言っていたのに、いつの間にか馴染んでるよな。」

「まず学校になんか住めるかよ。」

家出中で住む場所が無いから学校に住めって言われたら普通に引くだろ。

「え？ 学校に皆で寝泊りするの楽しいじゃん？」

石垣に肘をかけた出縄が言う。

「そっいつのは付き合いの長い友人とやる事だ。」

いくら好きな事でも試合とかじゃない限り、どこの馬の骨か分から

ない奴と一緒にやつてもあまり楽しくない。

修学旅行なんてのが丁度良い例だ。

小中高で三度あるであろう一大イベント、修学旅行。

今のところ俺は一度しか行っていないのだが、毎年、一番多い時は月一という頻度で転校を繰り返していた俺は修学旅行に良い思い出が無い。

修学旅行以外も良い思い出よりも嫌な思い出の方が比率的に多い。

小六の時の修学旅行は二学期に転校して早々の出来事だった。

誰とでも打ち溶け合える小学生と言えど、六年生の二学期に転校となると、既存の輪に入りづらくなる。

物事を深く考えるようになる代わりに、昔みたいに誰が相手でも隔たり無く接する事ができなくなる。

当時の時点で俺はその例に当てはまっていた。

とってもナイーブな時期だった。

自分が可愛くて仕方が無かった俺は他人の言葉にいつ攻撃されるか、いつ冷たく接されるのか、気が気でなかった。

不用意な言葉で敵意を引き出してしまう事を恐れ、俺は消極的であった。

その結果、班決めや部屋決めで盪回しにされ、修学旅行に行く前から傷つく事となった。

こんな奴じゃない。こいつのせいで班がバラバラになる。一人ぐらい人数が多くてもいいじゃないか。5人班じゃなくて6人班がいい、それが駄目ならこいつを受け入れない。

教師と争うクラスメートの姿を、俺は椅子に座って何十分も眺めていた。

閉じっぱなしの口の中で言葉にできない憤りが充満していた。

彼らは俺の事をクラスメートではなく、ただいるだけで邪魔な存在だと俺の目の前で、背後で、隣で言った。

教師は教師で、クラスに馴染めない俺の性格を責めた。

恥ずかしいのは分かるが、友達と仲良くやっていけないとこの先必

ず苦労する。

その性格を直さない限り君は大人になれない。

君みたいな恥ずかしがり屋は大勢見てきたが、大人になる為に皆自分を変えていった。

大人に恥ずかしがり屋はいない。もしもその性格のまま社会の荒波に飛び込んだら間違いなく自然の摂理によって淘汰される、と。

俺にこのような事を言った教師はこいつで4人目だった。

先生の言う事、大人の言う事はちゃんと守るべきだと教えられてきた俺だったが、この頃にはその教えに疑問を抱くようになっていた。俺は教師と教室の隣の倉庫の中に一対一で一方的に説教されていた時、口は開かず、じっと頭上の教師の目を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8220y/>

王様狩りに行こうよっ！

2011年11月24日14時57分発行